自分を確かめる

田中三保子

三月に、二年ないし三年担任した子どもたちを送り出した。振り返ってみると、彼ら彼女らは幼稚園という場で物に出会い人に出会い、身体ごと試しぶつかり、楽しい思いも挫折も味わい、そして何かを学び取る体験を重ねて卒園していった。端から見ればただ遊んでいるようにしか見えないことでも、それぞれにとっては、物や人を通して相手を知り自分を確認する大切な過程だったように思う。自身のやり方にこだわって自己表現し自己主張し、少しずつ自己調整できるようになって、彼らは保育者としての私の目の前を駆け抜けていった。私はといえば、個性の強さに圧倒されながらも、気持ちをくみ保育者としての思いを伝える努力をし、ときにどうしてよいかわからずに一緒に悩む日々だった。私の保育

者としての姿勢が問われていると思わされることもたびたびであった。

それから一月も経たないうちに三歳児を迎え入れた。そして今、ちょうど二学期が始まったばかりのところである。穏やかに友だちとのかかわりを楽しみながら遊べるようになった様子を目の当たりにして、子どもたちは三歳になったばかりの年齢でもすでに自分を確認する作業を始めていて、時期が早いほど根元のところから自分を問い直しやすいのではないかと改めて感じている。具体例を通してそのことを考えてみたい。

ちょうちょつかまえたよ

「せんせー、ちょうちょつかまえたよー」A夫の声に園庭への出入り口を見ると、彼が虫かごを私の方にかざしている。私は保育室の奥でD子にコンピューターを作っていた。すぐ行くべきかちょっと迷ったが、D子はずっと待っていたしあと少しでできあがるところだしと思って、返事だけして作ることを続けた。A夫はB夫、C夫と虫かごを見ながら話をしている。「ごめんなさい、遅くなっちゃって」と言いながらかけつけると、虫かごを見せてくれて、中にはしじみちょうが一羽入っていた。「すごいわねー。どうやって捕まえたの」と聞くと、それぞれに説明してくれる。一斉にではなくて、自然な形で順番に。そしてまた三人は山に戻っていった（園庭の一角にお山と呼ばれる小高いところがある）。私はこのときの様子に軽い驚きを覚えた。私への報告が誰かが誰かを押しのけるかたちでなく、相手が終わるのを待って一人ずつ行われたことに加えて、A夫の変化にであった。

A夫は入園してしばらくは周りの様子を見ながら遊んでいた。周りが見えてくると少しずつ行動半径が広がり、一人で山にも行かれるようになった。だ

んご虫をたくさん見つけて持って帰る日がちょっと続いて、ほかの子が真似をするようになったころ、ぱたっと虫取りをしなくなった。いつもと同じように袋を持って出かけていって戻ったとき、袋の中には園庭の砂利がつまっていることが重なった。「だんご虫見つからなかったの」そんなわけはないと思いつつ聞いてみると、「お母さんがだめって言った」とぽつりと答えた。砂利は虫の代わりだったのかもしれないと感じ、それならばせめて石拾いが楽しめるといいと思って、「Aちゃん、きれいな石があるの知ってる。チョコレートみたいな石もあるの」、と私はA夫を誘って一緒に石拾いをした。このころのA夫はまだ母親の気持ちに従おうとしているようだった。私が提案した石拾いだったが、A夫はしばらく熱中し、他の子どもにも伝播したりした。そしてだんだんと母親のことは口にしなくなっていった。

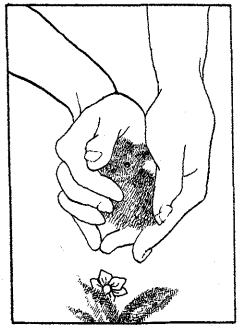
B夫は入園してしばらくは母親と離れられなかった。二週間ほどで一人でいられるようになったけれども、ほぼ同時に遊具を投げたり子どもをたたいたりするようになった。どうして突然そんなことをするのか理由はわからなかったが、心の中の何かに突き動かされてやってしまっている印象を私は受けた。何とか時間を作って外に誘うと穏やかに過ごせるが、私がなかなか外に出ていかれずにいるとB夫も室内にいて、泣き声に振り返ると誰かが彼にたたかれているというような日が続いた。A夫がだんご虫をつかまえてきたのを羨ましそうにしているので、A夫に声をかけて一緒に山に行ってもらったが、この時はだんご虫の魅力に惹かれて私に見送られて出ていくことができた。かなり長い時間が経って戻ってきたときには二人とも得意げで、たくさんのだんご虫を持っていた。この体験がよほど楽しかったらしく、そのときからB夫がA夫についてい

ることが多くなり、何もなければ私を必要としなくなった。

A夫とB夫が一緒にいる時間が増えてくると、今度はA夫も物を投げたり人をたたいたりするようになった。B夫の行動を間近に見るうちに誘発されたのだと思う。A夫の場合には、憧れのウルトラマンになって悪者をやっつけるつもりでそうしているらしいのだが、危なくて目が離せなくなった。そのうち、A夫はB夫と関係なく一人でも誰かをたたき、さっと物陰に隠れたりもするようになった。彼は私の視線に出会うとまずかったという表情になったが、その奥に、でもやってみたかったという彼の思いを私は感じた。ついやってしまってというより、意図的な行為のように思われた。そのたびごとに、身体で止めたり、相手は悪者ではないこと、理由のいかんに関わらずしてほしくないことを伝えても伝えても、しばらくは止まらなかった。

一方で、A夫はいろいろな体験を心から楽しんでいるようでもあった。年長組のお店やさんがきっかけで始まったアイスクリーム作りにも、ときどき思い出したように取り組んだ。ほかの子どもたちはもうすっかり忘れていたり見向きもしなくなったころに、「アイスクリーム作りたい」と言ってきて、「今度はレモン味にしよう」などと言いながら、一人であるいはB夫と楽しそうに作り、大事に持って帰った。

A夫は幼稚園生活を通して、自分を表現したり自己発揮する心地よさを徐々に感じ始めていったのだ



と思う。それとともにA夫の声のトーンはだんだん高く大きくなるようであった。山でいろいろな物をよく見つけてくる。そうすると、大声を張りあげて私を呼んだ。「せんせー、ほら、これを見ろ」私が目の前にいても精一杯声を張りあげたまましゃべる。A夫の気持ちが躍動しているのがよくわかるので、初めのうちは私も相づちを打つしかできなかったが、大声で絶え間なく叫ばれるとさすがに気になる。彼の嬉しさに共感しつつも、「もっと小さな声でも聞こえるわ」「見てって言ってくれると嬉しいんだけど」などと言ってみたが、彼にはほとんど届かないようであった。それほど毎日夢中で過ごしていたのだと思う。

二学期が始まって、A夫には前よりも落ち着いた印象を受けた。声の調子も普通になったし、動きもおとなしい感じになった。悪者に見立て戦いを挑んでいた友だちにごく自然に自分から近づき、一緒に遊ぶようになった。「ちょうちょつかまえたよ」と言ってきたとき、すぐに私に見てもらえなくても、必ず見てもらえると信じて友だちと穏やかに待つ余裕が感じられた。

A夫は幼稚園入園をきっかけに、家族と離れた新しい世界へ一人で歩みだした。そして例えば、自分の思った通りにやってみるおもしろさを味わい、工夫すればそれが実現できることを感じ取っていった。また、自分の行為に伴う相手の反応にはいろいろあって、ともに楽しむことの喜びも、相手に泣か

れたりたたかれたりする苦い思いも味わった。それらの一つ一つの体験がA夫を揺さぶり、また新たな行動へと彼を突き動かしていった。誰かに指示されたのでも強制されたのでもなく、自分の感覚、意思で動き、試し、味わう体験が自ずとA夫に変化をもたらしていった。

子どもたちは入園したてのころは、それまでに身につけてきた価値観や生活のしかたそのままに、毎日幼稚園で過ごす。ところが、一人ひとりが身につけてきたものは違っていて、自分の意思が通じなかったり思うようにならなかったりする。さらに周りの子どもたちのやりかたがモデルになって、いいことも悪いことも試してみようとする。そこから彼らなりの試行錯誤が始まるわけである。あれこれ繰り返し試し、さまざまな反応にぶつかり、嬉しかったりいやだったりする。一度で学びとれることもあれば何度も繰り返して試したいこともある。そうやって子どもたちは、幼稚園での生活を通して周りを知ろうとし、自分を確かめようとしているのである。この時期に、自分の五感をフルに使って確かめる体験を重ねていくことは、どんなときにもどんなことにも自分で立ち向かっていける力を養ってくれるのだと思う。

ここでは一人の子どもの一学期の軌跡しかたどることができなかったけれども、もちろんほかの十九人にもそれぞれの揺れ動く軌跡があった。二学期はまだ始まったばかりである。これから先、子どもたちがそれぞれのやり方で自分を確かめつつ世界を広げていかれるように、保育者として関わっていかれたらと願っている。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）